苦海に沈む仏道人身、
得難くして今すでに得たり
化身土の巻（坂東本）

ぐーがぐーぶつ
遇我遇仏
gu-ga gu-butsu

No.31
編集　日豊教区教化委員会
発行　真宗大谷派日豊教務所
〒879-0471
大分県宇佐市四日市1425-1
電話　(0978) 32-0050
Fax　(0978) 32-0092

…他流には、「名号よりは絵像、絵像よりは木像」と、云うなり。当流には、「木像よりはえぞう、絵像よりは名号」と、いうなり…

「真宗の本尊」で思い浮かぶのが、この蓮如上人御一代記聞書のお言葉である。「本尊」という言葉は記されてないが、あえて言うなら真宗の本尊は南無阿弥陀仏である。

「なむあみだぶつ」は如来の回向であり、称名念仏する私には帰命となる。帰命は必ず礼拝の形をとる。先達は南無阿弥陀仏のはたらきを文字に表して名号とし、視覚的な形として絵像、木像を、方便法身の尊像として伝統的に礼拝してきた。

そこに、上人があえて、「名号よりは木像」と「木像よりは名号」と、逆行する二つの方向性を示し、浄土真宗には「木像、絵像よりは名号」と、言われたのはなぜか。思うに、方便法身を礼拝する意味は報恩にあり、一念帰命の信心は方便から真実へと向かう、南無阿弥陀仏への帰命の道筋を示されたのだろう。

それにしても絵像、木像は尊く荘厳に見えるが、私には名号の方が有難い。何より、如来の存在を自分の身近くに感じる。だが、寺院やお内仏の中心となる本尊のほとんどは絵像、木像である。移ろいやまない我が思いを、あえて動かない形としての尊像を礼拝することで常に見つめ続けよというのか？浅学な身には未だはっきりとしない。

話かわって、共に聞法してきた推進員のAさんが8月初めに命終された。7月に入院され、見舞いに行こうという矢先だった。

聞法とはおよそ縁の薄かったAさんが総代になったのは5年ほど前の60才のとき。それからは寺の法要や聞法の場にはいつも顔を出されるようになった。宗祖の御遠忌に奥さんを誘って参拝され、ご縁に遇わせてもらったと喜んでおられた。その翌年、推進員教習を受講しませんかとお誘いしたら、二つ返事で受けられて再び上山された。念仏を声高にいう人ではなかったが、Aさんは光如来のはたらき南無阿弥陀仏にであったのだ。

枕経のお勤めの後、奥さんのお話では、「もう帰ってこれんかも知れんので家の中はちゃんとしておけよ」と言い残されての入院だったそうだ。奥さんは「いま思うと、親鸞聖人の御遠忌で一緒に本山におまいりできて良かったとつくづく思います。それが私には救いです」と語られた。穏やかにそう話されるのを聞いて、私は「いえ、Aさんは南無阿弥陀仏にであったんです。だから、あなたにも私にも救いがあるんです」と申し上げた。穏やかな葬儀の中で、「お浄土でまたお会いしましょう」と語りかける法友の弔辞に私は思わず頷いた。

白骨の御文をいただき、「後生の一大事」とは、自分を丸ごと有難いといただいてゆける念仏に出遇うことだとあらためて思わされた。本尊に呼び覚まされた人の生き様は、残された人の心をも安らかにしてくれる。

北九州真宗同朋会　2013年暁天講座

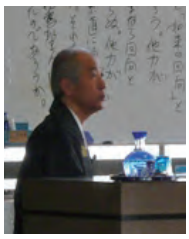
毎年7月の下旬に、北九州真宗同朋会では暁天講座を開催しています。

早朝6時からの1時間、正信偈のお勤めに始まり、ご法話、そして最後に恩徳讃の唱和で終わります。暁天講座とはお釈迦さまの時代の夏安居（げあんご）が起源といわれますが、もともと盛夏の季節、早朝の涼しいうちに、またお仕事に出られる前に聴聞しようと始められた講座です。

講座が開かれて40年以上経つと聞いていますので、51年前の会の創立後、間もなく始まったものです。会所はずっと変わらず、小倉北区中井の正明寺さんです。

子どものころ、訳も解らず連れて来られて、お勤めのあと法話中は近くの神社で虫捕りをしていた記憶があります。この40年余りの間に、日程が5日間だったり、7・8月に3日間ずつ2回に分けたりと、何度か変更がありましたが、現在では7月下旬に4日間としています。

講師は原則として外部から来ていただいています。



早朝4日間、毎朝かよっていただく関係上、近場の方にしかお願いできないので、講師依頼には苦労しています。今までに大谷派だけでなく、本願寺派のご住職にもお願いしました。今年は、会員のお一人である正明寺住職の藤ノ原惠行師に担当していただきました。

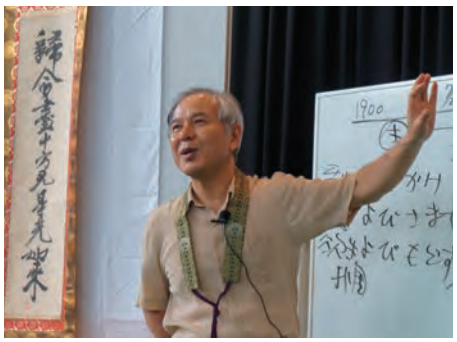
テーマは開講当初から『歎異抄』を読み、毎年1章ずつ学んでまいりました。もう3回転目に入っています。

参加者は毎回40名前後で、大谷派のご門徒以外の方もおいでになっています。開講当初から参加されている方もいれば、今年初めての方もいて、聞法経験は様々です。特に初めての方は、初日には『歎異抄』のことばなどチンプンカンプンのようでしたが、2日目3日目と回を重ねていくと、親鸞聖人の教えの世界へだんだんと引き込まれていく様子が見て取れて、聞法という場にとても興味深いものを感じます。

早朝の講座は決して楽なものではありませんが、4日間集中して聴聞できることや、私自身この場で育てていただいたことを思うと、この暁天講座は永く続けていきたいと願うものです。

北九州真宗同朋会会長　伊藤　洋

同朋の会推進員連絡協議会総会報告



第25回総会・研修会が開催されました。参加者174名、研修会では昨年に引き続き講師に田畑正久先生をお迎えして、テーマは「聞こう念仏のこころ」―願われ待たれている私を生きん！―。今年は会所を宇佐市のさんさん館にご縁をいただきました。

田畑先生より色々な角度から問題提起があり、その一つに「途中。中途半端」私達の生活は目的を立てて目的に向って努力し目的を達成するとさらに次々と目的が出て来て終りがない。どこまで行っても決まらない定まらない。途中のままで一生は死を迎える。そこで先生は死を迎える練習をしましょうと。その内容は朝、目が覚めたら今日も生かされている「南無阿弥陀仏」。夜休む時は今日一日生かさせていただきました「南無阿弥陀仏」と一日が終わる。その終わりを死と置き換えて一日一日に「区切り」を付け、念仏にはじまり念仏に終る日ぐらしをはじめてみましょうとの提起でした。先生は結びに「報恩行」という言葉を提起してくださいました。

ご恩に報いるお念仏の日ぐらしに辿り着くまでには、宿業の身、煩悩具足の身。信心。回心。等々の難問関門がある事でしょう。何も心配はありません。僧俗朋々に問い尋ね合って往けば必ず弥陀如来は、親鸞さまは、逆縁は勝縁へ、難信は正信へ、呼び戻し、呼び覚ましてくださる事でしょう。来るべく2016年には親鸞さま七五〇回御遠忌を新しい四日市別院本堂で報恩のお念仏で迎えたく願う事でございます。南無阿弥陀仏。

教区推連協前会長　鍛治谷　栄
（愚図釈の順諦）

日豊分室公開講座報告

6月1日、北九州市の小倉KMMビルにおいて、九教研日豊分室公開講座を開催しました。講師に本願寺派如来寺住職・相愛大学教授の釈徹宗師をお招きし、「真宗のカナメ」をテーマに講演をいただきました。

現代人の苦悩の原因や、身体・言葉・心の問題、そして現代の様々な事件を宗教的にどのようにとらえるのか。また、様々な視点から宗教をとらえ、浄土真宗のカナメを「真宗宗歌」になぞらえる事ができないだろうか、という展開でした。

多角的な視点をわかりやすく講義をしていただき、普段と違った視点から真宗学を見つめ直す良い機会となったと思います。

分室主任研究員　清原　聡

御遠忌総合推進委員会報告

四日市別院本堂保存修復工事着工さる！

「四日市別院本堂保存修復工事」について、松井建設㈱九州支店と5月17日に正式に契約を交わし、既報のとおり、今7月から本格的な工事が始まった。

本堂本体の工事に先立ち、先ず、荘厳・仏具類が若林仏具製作所により撤去され、仮本堂（教区会館2階講堂）に安置された御本尊・宗祖、蓮師の御影・仏具類を除く全ての仏具が若林へ搬出された（一部「報恩講」にて使用する仏具は別院留め置き）。

今後、契約に基づき内陣修復工事後の2016年春まで若林にて保管されることとなる。

なお、宗祖、蓮師の御影を除く各御影・お掛け軸は、当初、仏具と併せて若林にて保管することとなっていたが、大分県立歴史博物館の厚意により、博物館の温・湿度管理された保管室に無償で保管いただくこととなり、仏具搬出と併せて博物館に搬出された。

荘厳・仏具類の搬出が終わると、引き続き、若林により内陣金紙張りが剥がされた（剥がした金紙の再施工は不可）。

金紙張りを剥がす作業と平行し、松井建設により畳上げ、また、解体に先立ち各部材の定位置及び補修後の設置箇所確認の為、各部材に「番付け」がなされた。

各部材の「番付け」が始まると愈々工事は本格化の様相を呈して来、各柱がクッション材で養生されると、後堂の床板から解体が始まった。

後堂部分は床板（杉材）を外すと、更にその下に床板（松材）が出て来た。

これは、明治13年、現本堂再建当初のもので、当初床板材の上に新たに床板が張られたことが判った。

設計監理の福島氏曰く、旧床板等を視ると部材も松材で非常に分厚く幅広のものが使用され、釘一本をとっても和釘（角釘）が使用されるなど、貴重なもので価値が高い一方、床組材の中には何れかで使用されていた虹梁を再使用していることが確認され、先達は明治初めの世間全般が困窮している中、何とか立派な本堂を建立しようと苦心された姿が覗えるとのこと。

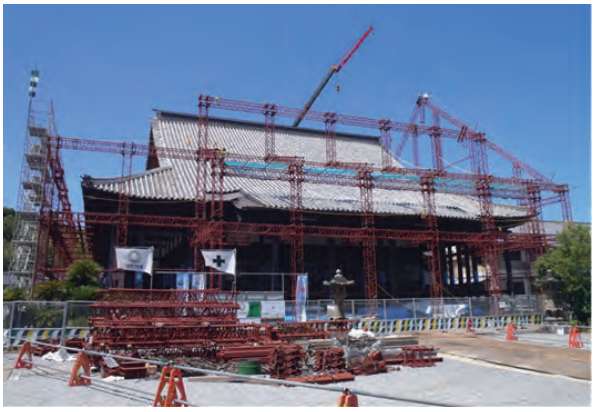
後堂の床板が外し終わると後、順に内陣、外陣、外縁、落縁と各床板が解体され、その後、外縁高欄が外されて行き、堂内下回りの解体は一旦小休止となった。

その後、作業は外回りに移り、今度は屋根面の作業に移るべく、まず、既存の外柵を拡張するなどして、資材置き場及び素屋根設置に向けて重機（クレーン車）設置スペースを確保。

現状、本紙面、原稿締切の8月23日現在、素屋根設置に向けた鉄骨にて組み立て中。

今後、素屋根が架かり、報恩講の際などに修復現場の視察が出来るよう足場が組まれる予定。（9月上旬完成予定）

●本誌HP（http://guga-gubutsu.com/）にて、御修復日記（工事進捗状況）配信中。



御用の際には会館前等に駐車いただいている。

しかしながら、特に報恩講の際等は恒常的に駐車場が不足する為、その一助として、また、今通常議会で可決・施行された「日豊教区災害救援本部規程」に謳う災害救援物資の備蓄倉庫設置の為、教区会館正面右奥（厨房横）のスペースに乗用車が乗り入れられるよう通用口の拡幅工事を行い、約8台の駐車スペースを確保した。（既に工事済。なお、拡幅工事費及び倉庫設置・救援物資の費用は本山経費）

会館裏通用口を拡幅

境内は、資材置き場・クレーン車等重機の出入り・駐機場所となっており、また、安全面への配慮も必要なことから、現状は基本的に本堂周辺の駐車は禁止とし、

会館トイレ改修

会館既存のトイレは老朽化が著しく使用不可の個室もあることから、議会での承認の上、年末の報恩講までに1階2階とも全面改修することとなった。（2階10月・1階11月予定）

講堂ベランダに屋根設置

これまで、会館2階講堂のベランダ2ヵ所のうち、後ろ部分につ

いては、特に報恩講の際の配膳等の便から屋根が取り付けられていたが、今回の本堂修復工事に際し、これまで本堂に保管していた備品類（ストーブ・扇風機ほか）の保管場所確保の為、前面にも屋根を取り付ける工事を行うよう議会で承認された。（8月中完成予定）

本堂裏の納屋移築

本堂裏にこれまで納屋があったが、本堂修復工事に支障を来たすことから、会館1階仏間奥の敷地に移築した。（8月末完成予定）

腰掛用机・椅子購入

これまで、別院には洋室が無い事から座机しかなかったが、予てから要望が多かったことから、今回、畳の上でも利用できる腰掛用の机18卓・椅子54脚を議会の承認のうえ購入した。

コラム　世間

ある坊守のつぶやき

呼ばれる坊守から名乗りとしての坊守への道

「坊守さんになる人として私たちの寺においでください。」・・・私を迎えに来てくださった総代さん達の言葉でした。一般の結婚なら「お嫁さんにください」というところだろう。私の「坊守」という言葉との最初の出会いである。

「坊守」は住職の配偶者の呼称であり、住職と共に教法を聞信し、寺を守り盛り立てることが勤めだと教えられた。真宗での最初の坊守は恵信尼様であり、法然上人が「良き坊守である」とお呼びになったと聞かされた。字句から言えば坊（寺）を守るということだから住職のことになろうが、他宗で言う「寺庭婦人」をわざわざ坊のお守りということにはおそらく深い意味があるのだろう。いろいろな解釈があるのだろうが、私にとって「これが坊守である。」という世界にはまだ達していない。

ただ、真宗の寺にご縁が出来たことで、悩み多き我が人生に「聞法せよ」と様々な出会いを通して教えを頂いた。人生の問題に行き詰まる、人生そのものに行き詰まるという二つの行き詰まりを教えていただいた。

坊守とは？という問いは「他から見られる坊守」をまずは探していく歩みであったと思う。もちろんそれも大事なこと。坊守にもいろいろあっても良いとも聞いた。

今の私は寺を守るという課題とともにに自分の人生の課題に精一杯の状態である。

内外の問題に右往左往している坊守から、門徒の皆さんに「坊守さん」と親しく声をかけられる普通の坊守へ、やがて昔のお年寄りが呼んでいた「坊守さま」の世界へと方向だけは見えてきたけれど、「はて　行き着けるだろうか？」と、遠い遠い道のりを感じている。

日田組　長善寺　坊守　大神眞理子

放射能から子どもを守る会・日豊「交流会」

8月4～5日、福岡県田川郡赤村の公民館で、放射能から避難・移住したり、保養にきた家族の交流会を開き、スタッフを含めて約60人が参加しました。

当初は川遊びなどを予定していましたが、この日は生憎の大雨で、公民館の中でボール投げなどして楽しく遊びました。その後は、「源じいの森」の温泉に入ったり…。

夕方には雨も上がり、みんなでソーメン流し。小さな子どもも、一生けんめい箸を使って流れてくるソーメンを食べていました。焼肉パーティでは、やまめや肉、採りたての野菜、焼きそばなどが、次々にみんなのお腹に。暗くなってくると、子どもたちは花火をしたりしながら、夜遅くまで楽しく遊んでいました。一方大人たちは、生ビールや焼酎なども飲みながら、これから移住したいという家族は、すでに移住してきた家族に、きっかけや住んでみての感想、仕事や住まい、保育園、学校のことなど、いろんな問題を夜遅くまで熱心に話しあっていました。

放射能から子どもを守る会
共同事務局長
林　正道

ゆふわく　福島の子どもを招待

7月25日から31日の1週間、原発事故でいまだに除染作業の続く、福島の子どもたちを招待する「ゆふわく2013」が、由布市の見成寺をメイン会場として開かれた。

5月に実行委員会がスタート。当日の食事スタッフ・留学生など、この事業に参加したボランティアは70名を越え、募金など資金面で賛同下さった方はおよそ1000名に及んだ。

3度目の企画で参加者は100名を越えたが、年々心の傷は内面深くに沈殿し始めたように思う。テレビや新聞で報道されることが少なくなった福島。初回の子どもが泣きじゃくりながら「忘れないでね」のことばが蘇る。限られた地域の住民およそ20万人に配られる月10万円の補償金、仕事もなく家に帰ることも出来ない人にとって、どんな意味を持つのだろう。福島の現実は日を追う毎に、格差は広がり〝絆〟という言葉を断ち切る、厳しい対立と断絶が起こっているという。傷ついた子どもたちが「思いっきり遊び、一瞬の安らぎ」を感じてもらうことが、今私どもにできる〝精一杯のムダ〟かと思う。

大分組　見成寺　日野詢城

写真で振り返る 御遠忌風景

日田組 5月20日

子ども奉仕団

8月の1日2日、今年も別院にて子ども奉仕団・小学生のつどいが開催されました。

仮本堂に40名もの子ども達が集まると、冷房が効いているはずの堂内も子どもたちの熱気で温度が上がり、何事も無い様な子ども達とは対照に暑さが駄目なスタッフ達は開会式の間暑い暑いと参ってしまいました。

私はスタッフとして参加して4回目となるのですが、毎年来てくれる子ども達が私の顔を覚えてくれるようになり、1年も経っているにもかかわらず受付で私を見つけると「寛子ねえちゃん！」と笑顔で駆け寄ってくれることに嬉しさと感動を覚え、同時に私はこんなに素直で人様に可愛らしいと思ってもらえる子どもだっただろうかと、この時期には昔を思い出して一人悶々とするばかりです。

今年のお話は江本真人さんによる「聞こう 念仏のこころ―願われ、待たれている私を生きん！―」というテーマでした。お話の後の学年別活動で子ども達はそれぞれ感じたことを思ったまま私たちに聞かせてくれ、難しい、よく分からないと言っていた子達も最後には皆がそれぞれに感じた「！」や「？」を共有しあうことができました。

今年は例年とは違い本堂を使うことができませんでしたがその中でも子どもたちは2日間とても元気に過ごし、私達に有り余るパワーを見せつけてくれました。

来年もスタッフとして参加して、子ども達からまた笑顔で迎え入れてもらいたいなと思います。

大分市組 浄雲寺 相馬 寛子

行事予定

9月	25日	女と男の寄り合い談義①	岡村 正淳 師
	25日	仏華講習会　長峯 顕教 師・田北 大精 師	
	26日	四日市別院秋季彼岸会	隈部 悟 輪番
10月	4日	婦人研修大会	真城 義麿 師
	15日	声明講習会	鈴木 友好 師
	16日	青少幼年に学ぶ公開学習会	
	22日	解放協議会 現地学習会	光武　均 師
	24日	女と男の寄り合い談義②	日野 敦子 師
	25日	京都組推進員・門徒会奉仕研修	豊岡 光闡 師
	31日	教区坊守声明講習会	三那三 文美世 師
			廣瀬 美奈 師
11月	6日	組門徒会員研修	隈部 悟 所長

敬弔【6月～8月】

ご生前のご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

京都組	妙覺寺	前住職　藤丸　昭	6月15日寂
京都組	龍王寺	前坊守　太田　章子	7月23日寂
田川組	因隆寺	前坊守　髙岡　良枝	7月24日寂
大分組	徳明寺	住　職　本田　哲正	8月　2日寂

別院人事異動

7月1日付で別院書記の異動があった。

着任

間下（ましも） 法慈（のりちか） 書記

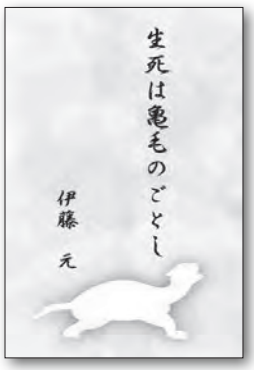
1993年3月22日 生

熊本教区第4組 信順寺

初めての経験ばかりでございますが、皆様のご指導をいただきながら勤めてまいります。宜しくお願いいたします。

退職

江本 真人



新刊書「生死は毛（もう）のごとし」

伊藤 元 著　1冊200円

毛でないものを毛と思い違いしているように、自分の欲望だけを自分の本心と思っている思い違い…人は本念ではもっとすごいこと願っているんではないか…（本文の一節より）

別院奉仕研修（6～8月）

■大分市組婦人会
（6月4日）参加者 84名
講師　長野 淳雄 師
お内仏の給仕　柿本 裕喜 師

■耶馬溪組
（6月19日）参加者 32名
講師　加来 知之 師
讃歌指導　細川真理江 師

編集後記

いつの間にか不惑を通過してしまった。惑うことが多い歳だからこそ「四十にして惑わず」と孔子は言ったという。その通りで、惑うことだらけの40代だった。天命を知るには程遠く、まだまだ惑う50代の始まり。

たまたま祖父のアルバムに目を通す機会を得た。大正時代の20・30代は小洒落た服装に生き生きとした表情。昭和に入ってしばらくすると表情が硬くなり、だんだんとキナ臭くなっていく。50代の太平洋戦争中となると、国民服にゲートル姿。戦争をしていないときが明らかに豊かである。

今年、国際会議での核不拡散共同声明に日本は署名拒否したという。「場合によっては核兵器を是認する」ということだ。ある政党は「国防軍」という言葉をチラつかせ、憲法の「戦争の放棄」の章題を放棄したいらしい。祖父の50代と重ならぬ我が50代であってほしい。（J）